

ミュンヘン日本人国際学校における地域の素材を活用した学習活動

前ミュンヘン日本人国際学校 教諭

奈良県生駒市立鹿ノ台小学校 教諭 大久保 智 子

キーワード：ミュンヘン、国際理解、現地理解、地域の素材活用

1. はじめに

ミュンヘンはドイツの南東部にあるバイエルン州の州都である。BMWやSIEMENSなどの大企業の本社があり、ドイツの中でも強力な経済力を持つ都市であると同時に、ドイツ最大級の大学や様々な研究機関をもつ科学や研究の先進地でもある。街中に多くの公園が配置されている緑豊かな都市であるミュンヘンは、アルプス山脈の北縁から50kmほど離れたオーバーバイエルンの高い平野に位置しており、市の東側にはイザール川が流れている。中世の古い街並みや美しい森と湖に囲まれており、地下水も豊富な美しい街である。

2. ミュンヘン日本人国際学校について

ミュンヘン日本人国際学校は教職員数30名、児童生徒数180名の小中併設の学校であり、ミュンヘンの日系企業の増加に伴い、児童生徒数も増加傾向にある。バイエルン州より「インターナショナルスクール」の認可を受けているため、ドイツ語の授業が各学年で週あたり3~5時間確保されている。また、学校の基本理念の中で「日本と同等以上の教育を目指す」と謳っており、日本の教育課程に沿った学習が行われている。



ミュンヘン日本人国際学校の外観

近年は「国際感覚の育成」に重点を置き、ドイツ語の授業やMT（ミュンヘンタイム）と呼ばれる国際理解学習を中心に様々な取り組みを行ってきた。ドイツを知ることだけでなく、日本を知ることや日本とドイツを比較し、共通点や相違点を見つけることによって国際感覚を養う取り組みを工夫してきた。さらに3年前からは、毎年秋に行われている文化祭を「ドイツ語学習発表会」とし、全学年がドイツ語での発表を行っている。

教科学習には日本の教科書を使用しているが、地域に根ざした教材を扱うことが多い小学校3、4年生の社会科学科では、学校で作成した副読本を使用して学習している。児童たちはこの副読本を読むだけでなくいろいろな場所へ見学に出掛け、見たり聞いたりしながら学習を進めていくことが多い。現地教材を用いて体験的に学習を進めていくことにより児童の興味関心がさらに高まり、主体的かつ自主的に学ぶことができる。以下にその実践を紹介する。

3. 地域の素材を活用した教育活動の具体例

(1) 1年生生活科「春（秋）を見つけよう」—公園たんけん—

ミュンヘンは公園や緑地が多く、自然環境に恵まれた土地である。日本とは気候が違うが、四季の変化もはっきりと感じ取ることができ、日本で見られる野草も多数生育している。児童たちはそこに出掛けて様々な植物を見たり、落ち葉や木の実を拾ったりすることができ、時には木の上を歩クリスの姿に出会うこともある。さらに冬になるとたくさんの雪が積もり、それらの場所はそりすべりの場へと変化する。

これらの具体的な体験活動を通して、児童たちは地域のよさに気づいたり、自分と身近な自然に興味関心もちそのよさを感じ取ったりすることができた。そして見つけた植物を押し花にしてしおりを作ったり、落ち葉や木の実で絵や工作をしたりするなど様々な活動に発展させていくこともできた。これらの活動ではドイツ語の教員も同行し、共に活動した。見つけた生き物や植物の名前、色、形などをドイツ語で話す活動を組み込んだこと

により、児童たちは自然の中で楽しみながらドイツ語を学習することができた。

(2) 4年生社会科「地域の公共施設」「町の発展に尽くした人」—国際児童図書館見学—

Internationale Jugendbibliothek（国際児童図書館）を見学した。中世後期に建てられたブルテンブルク城にあり、創立以来、主に各国の出版社からの献本によって成り立っている児童書専門の図書館である。また、ミヒャエル・エンデ博物館が併設されている。ここでは、第2次世界大戦直後、廃墟となったミュンヘンの街でイエラ・レップマンが「子どもの本は世界の架け橋」という信念の元に国際児童図書展を立ち上げ、そのことがきっかけで図書館が設立されたことを学んだ。地域の公共施設としての役割だけでなく、本を通していろいろな国や人の考え方を知ることが他者理解につながり、それが戦争のない平和な世の中へとつながっていくことも学ぶことができた。また日本から研究に来られていた方からも話を聞くことができ、図書館が「研究の場」という役割も持っていることや本の編集や出版という仕事について知るよい機会ともなった。

(3) 4年生社会科「地域の安全を守る」—消防署見学—

消防署見学では、様々な施設設備を観察したり、そこで働いている人から聞き取り調査を行ったりした。火災防止のための日常の取り組みや緊急事態に対する備え、火災発生時の対処などについて調べることができた。地域住民の初期消火訓練や、本物の火を使って消防隊員が人を救出する訓練を行っているところを目の当たりにし、地域の人々のくらしを守るための様々な活動を知ることができた。インタビュー後は、火災を発見したときにどう対応すればよいのかというロールプレイングも行った。子どもたちは日頃のドイツ語学習の成果を発揮し、ドイツ語を使って火事の通報をする体験ができた。

(4) 4年生社会科「くらしを支える水」からMT「水の旅」へ—貯水場見学・ビール醸造所見学—

2014年度の4年生は、MTのテーマを「水の旅」として学習を進め、文化祭でも発表した。ミュンヘン市には700以上もの泉や噴水がある。身の回りに豊富にある水、普段何気なく飲んでいる水、蛇口をひねると当たり前のように出てくる水は、どこからどうやって送られてくるのかを調べるところから始まった。

まず始めに貯水場の見学を行った。ガイドの案内でミュンヘン市の水道の仕組みや歴史等の話を聞いた後、貯水槽や発電施設を見学した。ミュンヘン市の水道水は、アルプスの伏流水が山の麓から地下のパイプを通して送られてくる。この水が消毒等の処理を施す必要がない天然のきれいな水であるのは、SWM（Stadtwerke München: 都市公社）が水質を守るために、水源地にある農家が農薬を使わず有機農法を行うことを推進していったことの成果である。水が送られてくるまでの仕組みや、ミュンヘン市に水道を引くことを指導したMax Josef von Pettenkofer（マックス・ヨーゼフ・フォン・ペッテンコーファー）の功績、安全な水を届けるためのSWMで働く人たちの工夫等を知ることができた。この学習を通して児童たちの心には水を大切にしようという気持ちも芽生えた。

その後、日本の水道についても学習した。川などから引いてきた水を浄水場できれいにしてから各家庭に送られてくる仕組みを知り、ミュンヘンとの違いに驚いた様子であった。しかし、そこで働く人たちの「安全な水を届けたい」という思いやそれに向けての努力は日本もドイツも同じであることが分かった。

Oktoberfest（オクトーバーフェスト：ビール祭り）で世界中から観光客がやってくるミュンヘンには、ビール醸造の会社が多数ある。ビール醸造は水を使った産業であり、バイエルン州の主要な産業の一つでもある。唯一小学生の見学が可能なAirbräu（空港内のビール醸造所）を見学した。ビール醸造のマイスターさんの案内によって、きれいな水があるからおいしいビールができること、水によってできるビールが変わること、水だけでなくホップや麦などの材料も全てバイエルン州で作られていることを学んだ。ミュンヘンの水のすばらしさを再確認すると同時に次の「地域の産業」の学習へ興味を持つきっかけにもなった。

(5) 4年生社会科「特色ある地域の産業」—バイオリン作りの聞き取り学習—

バイエルン州にあるMittenwald（ミッテンヴァルト）は、バイオリンの産地として世界的に有名である。1684年にMatthias Klotz（マティアス・クロッツ）がバイオリン製作技術を伝えて以来、今なおドイツにおける弦楽器製作の中心的な役割を担っている。この場所は、ミュンヘンからは車で2時間ほどの距離にあるので実際に4年

生が見学に行くことは難しい。そこで教員が当地を訪れ、バイオリン作りの職人さんに話を聞き、資料を集めて授業を進めた。さらにその後、日本人学校の保護者（バイオリン作りの仕事をされている方）にゲストティーチャーとして来ていただき聞き取り学習を行った。バイオリン作りの歴史や材料・道具の話、そして物作りに対する制作者としての思いなどを中心に話をしていただいた。ご夫婦それぞれからバイオリンの本体を作る仕事と弓を作る仕事、両方の話を聞くことができた。身近な人から話を聞くことによって児童の興味関心はさらに高まった。また、伝統的に受け継がれている職人の技術のすばらしさを肌で感じ取ることができるよい機会となった。

(6) 4年生MT「自転車教室」

ドイツの小学校では、4年生に警察官による自転車教室が義務づけられている。そこでバイエルン州認可校であるミュンヘン日本人国際学校でも自転車教室を実施しており、座学10時間（筆記試験を含む）と警察官の指導による実技講習12時間（実技試験を含む）の時間を確保し、学級担任・現地採用教員・ドイツ語部教員の協力の下、指導を行っている。自転車教室では、自転車の安全な乗り方や交通ルール、マナーを学ぶだけでなく、この学習を通じて学んだことを日常生活にも活用できることを目標としている。この学習を通して児童達は、ドイツの交通ルールを知ると同時に現地の文化を理解することができた。



自転車教室の様子

(7) 現地校との交流

現地校との交流活動はドイツ語教員と現地採用教員（通訳）の協力のもと、現地校訪問と招待を各1回ずつ行っている。1年生から4年生までの4年間は連続して同じ学校と交流をしているので、児童同士も顔なじみになり「今年もまた会えたね」という感じである。書道や昔遊び、食べ物などの日本の文化を紹介したり、一緒に体験したりする。児童達にとっても「日本の文化」にふれたり考えたりする良い機会となる。知っている限りのドイツ語とジェスチャーとを使って何とかコミュニケーションをとろうと一生懸命活動する児童の姿は、見ていて微笑ましい。現地校交流は異文化理解やコミュニケーション能力育成の絶好の機会である。

4. 地域素材の教材化

(1) 季節の行事

ミュンヘンには古くから受け継がれてきた季節の行事がある。キリスト教に関するものも多いが、世界各国から大勢の観光客が集まるイベントであると同時に、児童にとってはドイツの文化を知る絶好の機会となる。また、これまでに学んできたドイツ語を生かす機会ともなる。

Christkindlmarkt（クリスマス市）もその一つである。買い物をしたり店の人やお客さんたちにインタビューしたりする活動では、何とかして自分の意志を伝えようと努力する。ドイツ語を話すだけでなく、ジェスチャーなども交えながら一生懸命に伝える。苦勞しながらも自分の言いたいことが相手に伝わったときの感動や達成感、他では味わうことのできないものである。

このほかにもOktoberfest（オクトーバーフェスト：ビール祭り）、Fasching（ファッシング：カーニバル）等の活用が考えられる。お祭りに参加するだけでなく、その歴史や関連する食べ物について学んだり街に出掛けてドイツ語を使う活動をしたりすることは、ドイツの文化をより深く知る貴重な機会となる。

(2) イザール川

イザール川の河岸には緑地が続き、遊歩道や自転車道が整備されており、気候がよくなると多くの人が散歩やサイクリングを楽しんでいる。また、川で泳いでいる人や川辺で読書や休憩をする人、食事をする人なども多く、市民の憩いの場となっている。

この川も教材として見れば、いろいろな活用方法が考えられる。河原の石を使ったアートもその1つで、いく

つかの学年が実施していた。長い距離を流れてきた河原の石は角が取れた丸い石で、これを並べて何かの形を作ったり、アクリル絵の具を使って石に絵を描いたりして様々な活動を楽しむことができた。川の様子を詳しく調べてみると、治水対策として堤防をそのままの自然な形で残したり、上流に人工湖を作ったりされている。また水力発電所も設けられており、社会科や理科の学習材料としての活用が考えられる。

(3) 化石

南ドイツには世界有数の化石の産地がいくつかある。Solnhofen（ゾルンホーフエン）とHolzmaden（ホルツマーデン）は、学校から1時間半~2時間くらいで行くことができ、校外学習の場として活用できる。どちらの場所も入場料を払うと自由に化石発掘ができ、日本ではなかなかできない貴重な体験ができる興味深い場所である。ミュンヘン日本人国際学校でも5、6年生が学習に出掛けている。

ミュンヘン日本人国際学校の校舎では床材や外壁にゾルンホーフエン周辺の石材が使われていて、その中にアンモナイトなどの化石を見ることができる。校舎内での化石発見は、実際の化石発掘体験への意欲付けとなる。

Naturpark Altmühltal（アルトミュールタル自然公園）の辺りの地層は白ジュラと呼ばれ、アンモナイトや貝、魚などの化石が豊富である。Solnhofen（ゾルンホーフエン）は始祖鳥発見の地としても有名であり、近くにあるBürgermeister-Müller-Museum（ゾルンホーフエン博物館）やJura-Museum Eichstätt（ジュラ博物館）ではオリジナルの標本を見ることがもできる。一方、Holzmaden（ホルツマーデン）はシュツットガルトの南東約20kmに位置し、黒ジュラと呼ばれる地層が特徴である。採石場ではアンモナイトの化石を容易に見つけることができる。またこの地域で産出した化石のみを展示しているMuseum Hauff（ハウフ博物館）もあり、魚竜、ワニ、ウミユリなどのすばらしい化石を見ることができる。

(4) 戦跡

ミュンヘンはナチ党発祥の地であり、かつてはヒトラーの活動拠点となっていた街であるため、ナチやヒトラーにまつわる戦跡がKönigsplatz（ケーニヒ広場）周辺を中心に数多く残っている。また、ミュンヘンの北西にはダッハウ強制収容所跡がある。ドイツで最初の強制収容所であり、政治犯のための強制収容所として創設された。解放されるまでの12年間に、30以上の国から20万人以上の人収容され、41500人も命が奪われた場所である。ここでは常設展示やドキュメントフィルムを見ることができ、敷地内では復元されたバラックやガス室、焼却炉も見学できる。鉄の柵でできた門にある‘Arbeit macht frei’（働けば自由になる）の文字や国際慰霊碑が印象的である。歴史の事実に向け、人権や平和について学ぶ場として有効に活用できる。

6. 終わりに

この3年間は「国際理解」「地域の素材活用」という観点でいろいろな学習活動を検討してきた。保護者の仕事等の理由により海外で居住し在外の教育施設で学んでいる子どもたちにとって、現地での生活や人々とのふれあい、体験は、国際感覚を身につける良い機会である。この3年間に取り組んだ各種の実践からは、身近な地域の素材を活用したり児童が実際に体験したりすることから生まれる児童の興味関心、意欲の高まりを肌で感じ取ることができた。また、現地のことを知るだけでなく、日本のことをよりよく知ることの重要性も感じた。日本国内の教育現場に帰任した今、日本国内の学校で行う教育活動の中でどのようにしてグローバルな視点をもった子どもを育成していくのか、その手立てを探りながら、今後も児童の国際性を豊かに育む教育活動を実践していきたい。